

表3 最終プログラム概要

回数	セッションの目的	内容	宿題
1	「困る」についての概念的理解	<ul style="list-style-type: none"> 紙芝居の話聞いて、主人公がどのような状態にあるのか考える。 「困る」とはどういうことか呈示、理解を促す。 たとえば、どんなときに「困る」のか、選択肢の中から選ぶ。 	「困ったこと日記」 ・毎日の困ったことを書く日記
2	「困る」についての体験的理解	<ul style="list-style-type: none"> 自分自身はどんなときに「困る」のか、「困ったこと日記」を見ながら記述。さらに、自由記述でも記入。 ロールプレイを見て、主人公が困ったときにどうなっているか声や体の変化について、考える。自分の場合はどうなるかも記述。 	「困ったこと日記」 ・毎日の困ったこと、困ったときにどうなったか書く日記
3	困ったときの対処スキルの獲得	<ul style="list-style-type: none"> 紙芝居の話聞いて、困った場面で主人公がどうすればいいか、考える。 「困ったこと日記」のなかか、自分が困った場面を選択し、どうすると良かったか考える。 	/

表4 最終プログラムの本人評定

評価項目	プログラム前後の変化			プログラム前と1週間後の変化		
	上昇	なし	下降	上昇	なし	下降
①「困る」ということがどういうことか知っている	1	3	1	0	2	2
②自分がどういときに困るかわかる	1	2	2	1	1	2
③困ったとき、どうすればいいかわかる	4	1	0	0	2	2
④自分が困った時どうなるか分かっている	2	2	1	0	2	2
⑤困ったとき、誰かに言うことができる	2	3	0	0	3	1
⑥困ったとき、周りを見て行動することができる	3	1	1	1	3	0

(単位:人)

（主任研究者 奥山真紀子）

分担研究報告書

新しいソーシャルスキル・トレーニングを含んだ治療法の開発
③高機能広汎性発達障害児の完璧主義に対するプログラムの作成の試み

分担研究者 辻井正次 中京大学 現代社会学部教授
研究協力者 吉橋由香 子どものこころの発達研究センター特任助教
林 陽子 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科
田倉さやか 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科

研究要旨

完璧主義で困ることがある高機能広汎性発達障害児（以下、PDD）を対象に、認知行動療法的な形式のプログラムを作成し、その有用性を検討した。実施した結果、プログラムの効果は認知の変容と日常生活への汎化としてみられ、プログラムは有効であることが示唆された。なお、効果がみられにくかった児童も存在したため、内容の改訂と個人のニーズに合わせた形での実施が可能になるようプログラムの充実を図っていくことが今後の課題である。

A. 研究目的

広汎性発達障害（以下、PDD と記す）は、社会性の障害、コミュニケーションの障害、イマジネーションの障害（こだわり行動）を中核症状として示す。

知的な遅れのない高機能児によく見られるこだわりのひとつに、「1番になること」「最後までしっかり頑張ること」「ミスなく完璧に完成させること」といった完璧主義的なものがある。イマジネーションの障害（こだわり行動）への対応の基本は、これを無くすのではなく、より適応的な行動（表現）や内容として活用していくことであるが、完璧主義的なこだわりには、適応的といえる面と、支援が必要となる面の両面が存在する。

まず、本人が目標と達成感をもちやすいという面、まじめさや作業の正確さといった、適応的な行動として評価される面は、完璧主義的なこだわりの良い面である。一方、時に他者の行動が完璧でないことに対する許せなさ・融通の利かさとして現れることがある面、場合によってはうまく力が抜けずに心身ともに負荷をかけすぎてしまったり、思った通りにいかなかった場合に不安に陥ったりと、本人の苦しさにつながることがある面については不適応的側面であり、支援が必要である。

不適応的な完璧主義的思考は、近年盛んに行われるようになってきた認知（行動）療法における歪んだ認知の特徴の一

つとしても取り上げられており、認知と行動の変容によりより快適に過ごすことが可能であることが言われてきている。

よって、本研究では、認知行動療法的な手法を用いた「完璧主義対応プログラム」を作成し、高機能 PDD の児童を対象として実際に実施してみることとする。

B. 研究方法

1. 対象

特定非営利活動法人アスペ・エルデの会に所属する小学2年から中学1年までの高機能 PDD 13 名(男児 11 名, 女児 2 名)に対し、プログラムを実施した。なお、PDD 群は小児科医あるいは児童精神科医から DSM-IV-TR による診断を受けており、知能指数は 70 以上の児である。対象児の内訳を表 1 に示す。

2. プログラム内容と実施

① プログラムの概要

完璧主義的思考を変容させるためには、自分の特徴を知り、思考のあり方と変容の可能性を学習する必要がある。

したがって、プログラムの構成は、まずは自分の特徴をチェックし、例題を通して完璧主義を学習する段階からスタートした。その後、「自分の場合はどうするか」を考える段階に入った。いずれの段階も、PDD のイマジネーションの障害を考慮し、具体的なエピソードを取り上げて行った。

これらの内容は、プログラム用に作成したワークブックを用いて進めた。プログラムの進行は指導者 1 名(臨床心理士)が行い、各児童には担当のボランティアスタッフがいた。

プログラムは、3 日間連続で 1 セッション 2 時間ずつ短期集中して行う形式(以下、3 セッションバージョン)、及び

隔週で 1 回 45 分ずつ 4 セッションに渡り行う形式(以下、4 セッションバージョン)に分けて実施した。

3 セッションバージョンの対象は、児童 1 から 7、4 セッションバージョンの対象は児童 8 から 13 であった。

4 セッションバージョンの場合、毎回宿題と日記を行い、日常生活への汎化を促した。各セッションの内容を表 2 に示す。

また、毎回出させる宿題の日記では、普段の生活の中から良い感情の要因となるものを探したり、「完璧にできなくてだめだ」と感じた出来事をまとめたりして、それがどのようにしておさまっていったのかを振り返った。

自分の宿題や日記、回答については、発表の機会を設けた。これによって、人によって感じ方がいろいろであること、いろいろな考え方のパターンがあることを理解するように促した。

② 評価

プログラム実施前後での子どもの様子の変化を調べるため、次の 3 つの調査を行った。

まず、プログラムの開始時と終了後、終了から 1 ヶ月後に Stallard, P. (2002) の「誤った考え方のセルフチェックリスト」(17 項目 3 段階評定: 17~51 点, 高得点ほど不適応的な完璧主義的思考傾向が高い)を記入してもらい、完全主義的な思考の傾向と認知の変化をみた。

また、保護者に対しても同時期に同じチェックリストで各児童の様子をチェックしてもらい、さらに児童の完璧主義的な行動について自由記述のアンケート調査を行った。

(倫理面への配慮)

浜松医科大学倫理委員会、および、当事者団体である NPO 法人アスペ・エル

デの会の倫理委員会で、実施の承認を得て実施した。研究への参加については、当事者家族及び本人の意思を十分に尊重し実施するなど、倫理的な側面に対する最大限の配慮を行った。

C. 研究結果

1. セルフチェックリストの変化(図 1.2)

3 セッションバージョンについては、プログラム開始時から終了時で得点が減少した児童は7名中5名だった。さらに、プログラム開始時から終了後1ヶ月後で得点が減少した児童が3名、一方、得点が増加した児童3名だった。

4 セッションバージョンについては、プログラム開始時から終了時で得点が減少した児童は6名中5名だった。この得点が減少した5名は、終了時よりもプログラム終了後1ヶ月に得点は増加するが、開始時と比べると得点は減少したままであり、プログラムによって認知が変容した状態が維持されていることが分かった。

2. 保護者のチェックリストの変化(図 3.4)

3 セッションバージョンについては、プログラム開始時から終了時で得点が減少したと評価した保護者は5名中4名だった。さらに、プログラム開始時から終了後1ヶ月後で得点が減少した評価した保護者は6名中5名だった。

4 セッションバージョンについては、プログラム開始時から終了時で得点が減少した評価した保護者は6名中3名だった。さらに、プログラム開始時から終了後1ヶ月後で得点が減少した評価した保護者は6名中5名だった。

3. 保護者のアンケート内容

プログラムの実施効果が見られたと思われる回答に、「ネガティブな気分になっても、切り替えるまでの時間が短くなった」(児童1, 7, 10, 12)「“まあいいか”と言う回数が増えた。」(児童1, 10, 12), 「自分で気持ちを切り替えようするようになった。(切り替えて次の行動へ移ることができる)」(児童1, 7), 「行動の明らかな改善よりも、自分自身はこういうタイプだ!と客観的に理解できたことが、とてもプラスになったと思う。」(児童1)などがあった。

一方、「特に変化は見られない」という回答もいくつか見られたため、プログラムの改善が必要である。

D. 考察

①不適応的思考の変容

セルフチェックリストの得点変化の結果から、13名中8名がプログラム終了後1ヶ月しても適応的な思考への変化が持続していることが分かる。特に、4セッションバージョンの方がその傾向が強く、この評価は保護者評価とも一致している。よって、プログラムによって、適応的な方向への認知的な変容が生じたといえる。

実施方法による違いがみられた要因として、4セッションバージョンでは、日記などを用い、日々の生活に根ざした形でプログラムを進行できることが大きく影響していると考えられる。

②日常場面への汎化

保護者のアンケートより、日常生活においても、気分を切り替えることが早くなり、適応的な行動への移行がスムーズになったことが伺われる。

ただし、「日常場面でのストレスが多い時期で、なかなか学んだことが実施できなかったため、今後活かしたい」という声もあったため、汎化させるためには、

実施のタイミングなども慎重に選んでいくことが重要であることが分かった。

特になし

E. 結論

結果から、認知行動療法的な形式によるプログラムは完璧主義的傾向を持つPDD児の認知と行動の変容において有効であることが明らかとなった。ただし、短期間では効果が現れにくい児童もいたため、今後はより長期的な介入が必要な児童に対する介入プログラムの開発などを行っていくことが望まれる。

【参考文献】

- Stallard, P. (2002). Think Good - Feel Good: A Cognitive Behaviour Therapy Workbook for Children and Young People. West Sussex England: John Wiley & Sons.
(スタラードP. 下山晴彦(監訳)
(2006): 認知行動療法ワークブック
金剛出版)

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

1) 吉橋由香・藤田知加子・辻井正次：
広汎性発達障害児の感情の概念的
理解と自己の感情体験の統合に
関する研究。中京大学現代社会
学部紀要, 2(1), 印刷中。

2. 学会発表

1) 吉橋由香・神谷美里・宮地泰士・野村香代・辻井正次 広汎性発達障害の自己感
情に関する研究(1)－表情に関する考察
－。第99回小児精神神経学会, 2008。

H. 知的財産権の出願・登録状況

表1 対象者一覧

No	学年	性別	VIQ	PIQ	FIQ
1	小2	男	125	127	129
2	小2	女	85	80	94
3	小5	男	118	131	126
4	小5	男	71	106	86
5	小6	男	105	124	121
6	小6	男	121	108	117
7	中2	男	106	85	96
8	小5	男	133	127	133
9	小5	男	140	132	140
10	小5	男	111	79	96
11	小6	男	120	104	114
12	中1	女	97	75	85
13	中2	男	90	75	81

表2 プログラムの概要

3セッションバージョン	4セッションバージョン	概要	目的	宿題
#1	#1	セルフチェック	質問紙を用い、「自分をだめだと思う考え方」「完璧主義」についてセルフチェックを行う	宿題①
		完璧主義とは?	ショートストーリーで具体例を挙げ、完璧主義とはどんなことを指すのか考える例①きちっとさんだからそのいいところを考える/例②困ることを考える/例③しっかりやるところと困っているところ、両方があるということに気づく	一日をふり返って「良かったこと」「嫌だったこと」を書く その時にどんな気持ちになったか、記載されている感情語(嬉しい、悲しい、自分はだめだ、など)に丸をつける
		まとめ	フローチャートを用い、完璧にできなかった場合にはまってしまうネガティブな思考のループを解説する	
#2	#2	ネガティブな思考について学ぶ	ショートストーリーで具体例を挙げ、完璧主義に特徴的なネガティブな思考について学ぶ 例①だめなところばかり見えてしまう/例②100%でなければだめだと思込む/例③だめだと思ったことはやろうとしない	宿題② 宿題①に加え、「だめなところばかり気になったことはなかった」という質問に答える あった人は具体的なエピソードを記入する
		ネガティブな思考のループにはまった場合について考える	どのように大変かを考え、はまってしまうと抜けにくいことに気づく/抜けると楽になることを知る	
	#3	どうすれば抜け出せるか? (「視点を変える」ということのガイダンス)	具体例を挙げプロセスを学ぶ 例①プロセスを見る/例②完璧に行かなかったことにより学ぶことがあることを知る/例③完璧に行かずに終わるのではなく、次のチャンスがあることを知る	宿題③ 宿題①に加え、「嫌だったこと」があった人はその後どのように気持ちを切り替えたかという質問に答える
		まとめ	完璧主義的思考が生じて、考え方を変わるとポジティブに過ごしていけることを学ぶ	
#3	#4	自分について考えてみよう	自分も完璧主義思考を持っているか?、ネガティブな思考のループにはまることはあるか(抜けると楽になれるか?)、完璧にできなかった困ったエピソードを取り上げ、その場合、困った面のほかに良い面もなかったか?について考える	宿題④ 宿題③と同様 考え方を考える、気持ちを切り替える練習を繰り返す
		視点を変える練習	視点を変える・考え方を考える練習/視点を変えるために役に立つキーワードを探す	
		まとめとセルフチェック	#1~3の学習内容の振り返りとまとめ及び#1と同じ質問紙でセルフチェックを行う	

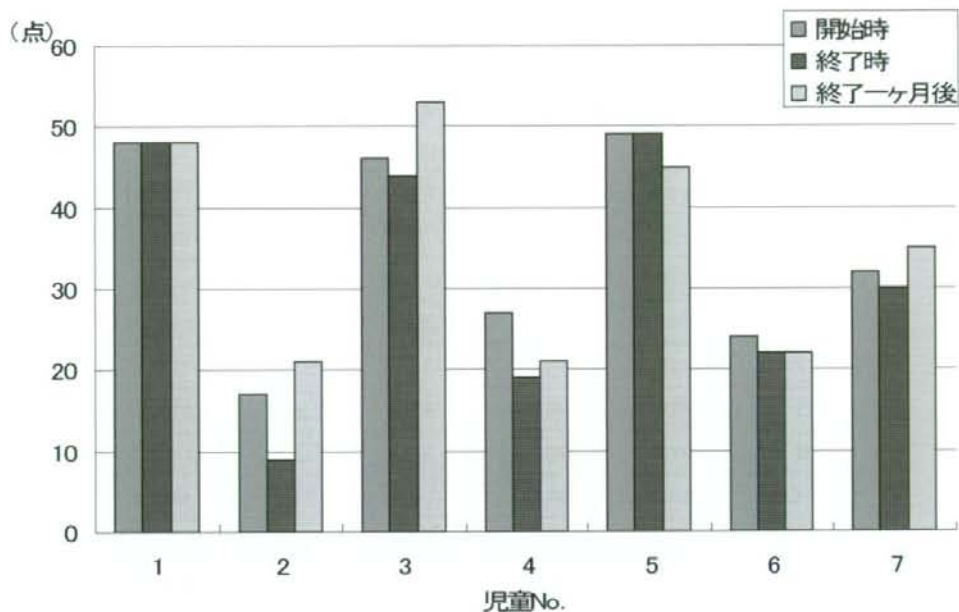


図1 3セッションバージョン セルフチェック変化

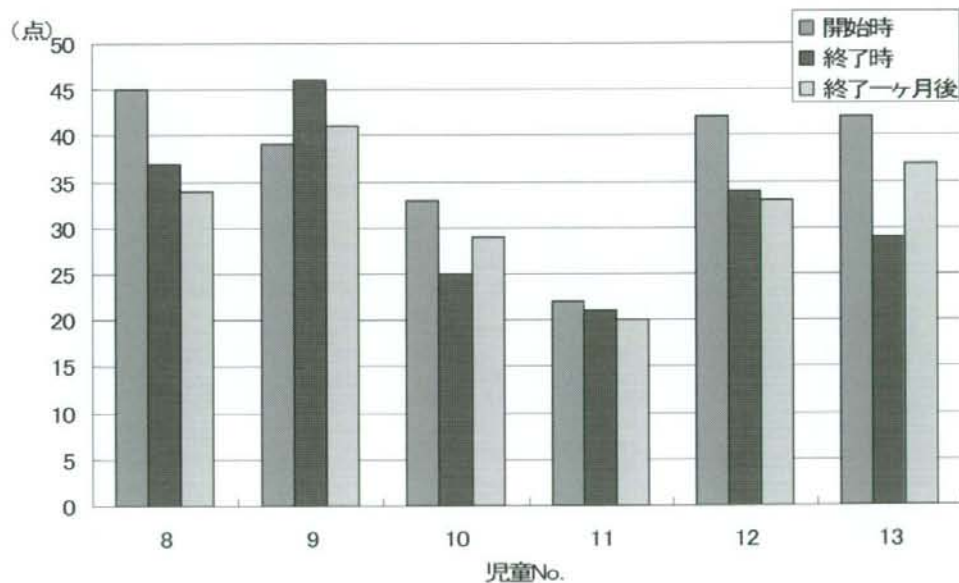
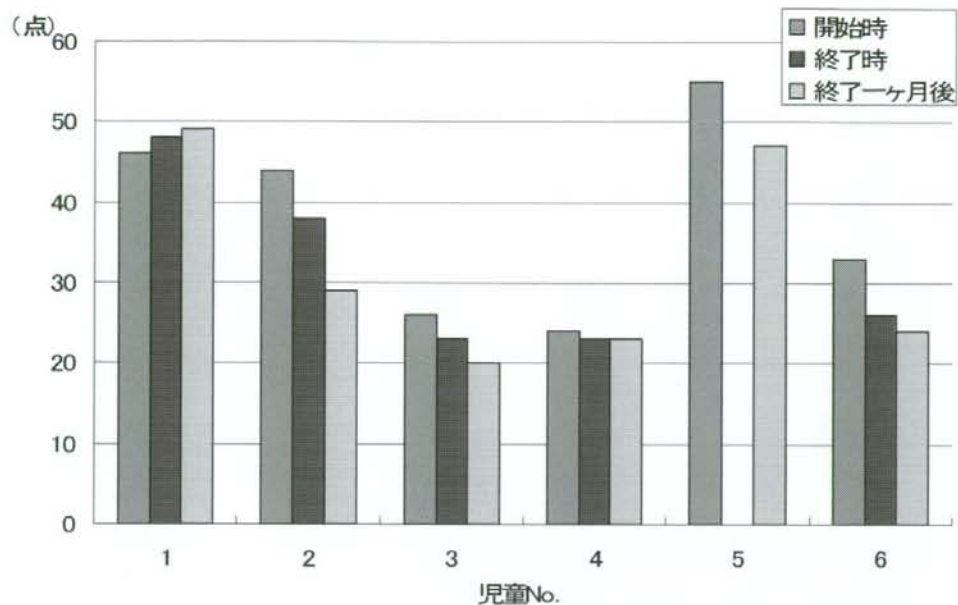


図2 4セッションバージョン セルフチェック変化



注) 児童5のプログラム終了時のアンケート、児童7のすべてのアンケートは回収できなかった。

図3 3セッションバージョン 保護者評価変化

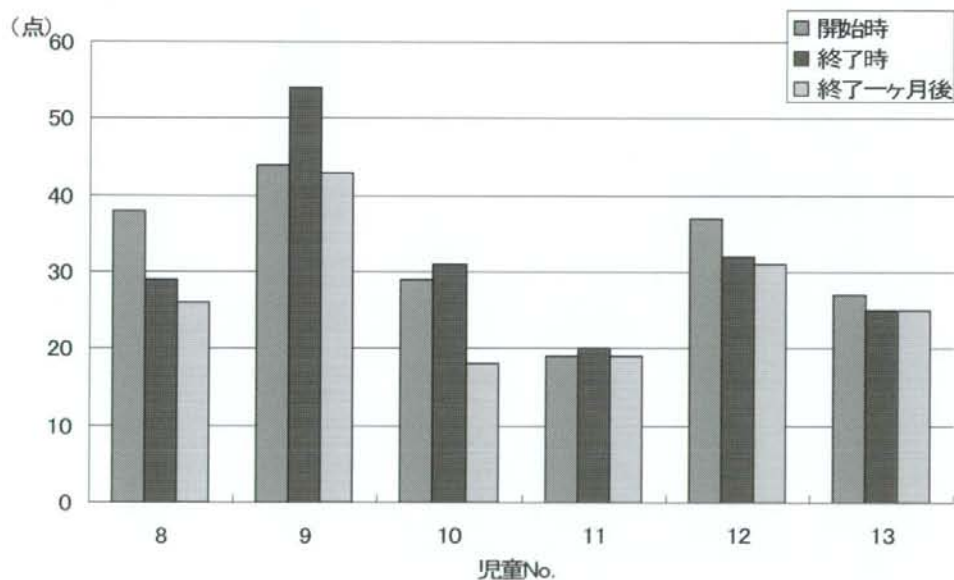


図4 4セッションバージョン 保護者評価変化

（主任研究者 奥山真紀子）

分担研究報告書

教育現場で可能な発達障害の評価法および治療法の開発

分担研究者 井上雅彦 鳥取大学大学院医学系研究科教授
研究協力者 古谷奈央 兵庫教育大学 学校教育研究科

研究要旨

本研究では通常学級を含めた特別支援教育に携わる教師を対象にした行動問題に対応力を高める効果的なトレーニングプログラムの開発を目的とし、地域的制限のないインターネットを利用したe-learningによる研修とコンサルテーションの効果を検証しようとするものである。研究1では複数の本邦学会誌を対象に通常学級を含めた特別支援教育における行動問題に関する4年間の実践研究のレビューと分析を行い環境調整・および機能分析をベースにした応用行動分析学に基づくアプローチの有効性が示された。研究2では、特別支援教育に携わる教師を対象にしたe-learningによる研修ニーズやアクセスするためのスキルについての調査研究を行った。研究3では昨年度の研究に引き続き、教師を対象にした問題行動に関するe-learningによる研修プログラムを開発し、その効果を検討した。結果、事前・事後に行ったアンケートの結果、KBPAC、効力感尺度およびCBCLの得点の改善がみられた。

研究1

教育現場での効果的技法に関する文献研究

A. 研究目的

特別支援教育の中でも行動問題についての対応ニーズは最も高いとされている。本研究では、複数の本邦学会誌を分析対象として教育現場の中で教師が実際に使用し効果を上げることが可能な技法について明らかにすることを目的とする。

B. 対象と方法

1. 調査対象

学校教育の中での実践研究の分析という観点から、日本LD学会、日本特殊教育学会、日本教育心理学会、日本発達心理学会、日本行動分析学会、日本行動療法学会の学会機関誌及びその発表論文集を分析対象とし、学校現場で問題行動への指導を行っているものを抽出選定した。ただし専門機関で主に指導を行い学校での般化データを測定している論文や両方での指導を行っている論文も対象とした。評定者2名がペアとなり、対象となる学会誌及び発表論文集から上記の基準で判断し、対象論文を抽出した。

2. 評定者

評定者は第一著者の他、大学院で発達障害児の臨床に関する専門教育を受け、1年半以上の臨床指導経験を有し、複数回の学会研究発表歴のある大学院修士課程在籍の学生及び修了生であった。

3. 手続き

1) 調査項目とその選定

調査項目は、学校及び学級種、対象児童生徒の障害種と程度、指導形式（個別・小集団・学級全体・学校全体）、主たる指導の場（学校場面・専門機関・学校と専門機関の両方）指導にあたった人（人数とその立場・コンサルタントや加配の有無）、問題行動の種類、指導技法、指導の効果であった。

指導技法の効果判定の基準は1-5の5段階とし、5統計上有意な変化もしくは単一被験体法の使用の中での改善、4数値上、エピソード上での改善など具体的に記述されている、3明確な結果は記載していないが改善が記述されている、2変化無し、1悪化の基準によって2名の評定者により分類した。

2) 調査手続き

1論文につき評定者2名でペアとなり、調査項目を記載した調査用紙に記入した。アセスメントは行っているが指導していないもの、予防的アプローチとして行っている社会的スキルトレーニングや集団随伴性などは評定から除外した。

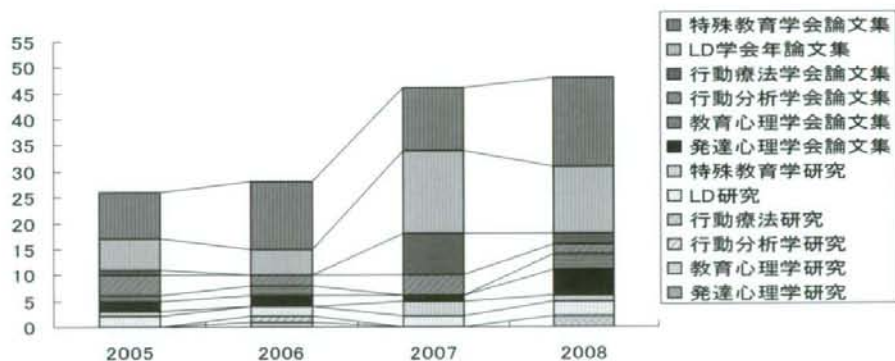


Fig.1 掲載数の推移

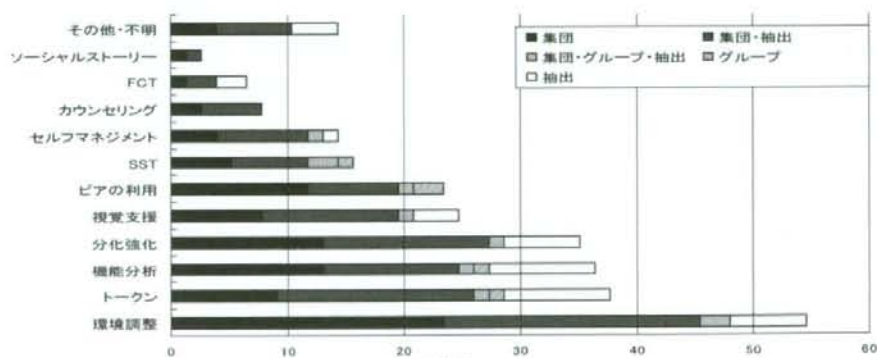


Fig.2 通常学級における研究で使われた技法の使用頻度と介入形式

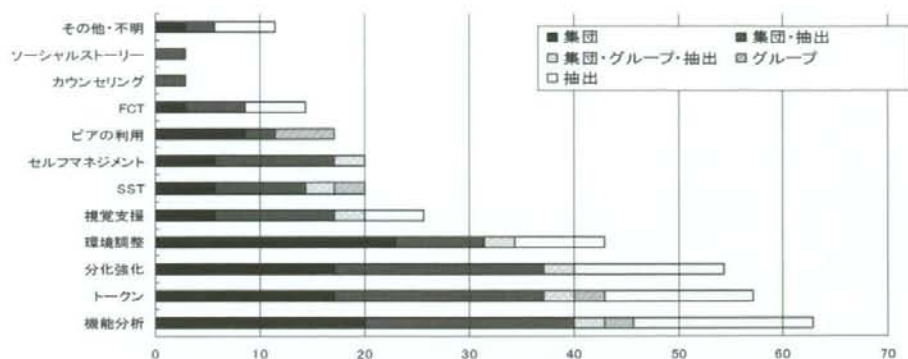


Fig.3 改善が見られた通常学級における研究で、使用された技法の頻度と介入形式

3)倫理面での配慮

文献研究のため該当しない

C. 結果

総数148件の論文を抽出し分析した。年代別推移をFig.1に、主として通常学級で行われた技法をFig.2に、改善が見られた通常学級での研究で使用された技法をFig.3に示した。また「他傷他害」「自傷」「こだわり」「感覚過敏」「奇声・大声」「逸脱」「不登校」など行動別にみた適用数と効果検討では「自傷」以外は環境調整の適用が最も多くその効果も示されていた。「自傷」に関しては分化強化、が最も多く、続いて機能分析、FCT（機能的コミュニケーション訓練）、環境調整、視覚支援などが同数で続いていた。

D. 考察

これらのデータから実施しやすい技法は環境調整やトークンがあげられ、機能分析、分化強化、トークン、環境調整、視覚支援など応用行動分析学やTEACHHなどに基づいた技法の有効性が示唆された。しかしながら、数値的データを測定して効果を証明している研究は少なく、その多くが記述によるものであり今後の実践研究における課題となった。

研究2

特別支援教育におけるe-learning研修に関する教師の意識

A. 目的

問題行動の認知、及びe-learningに必要なパソコンスキルに関する質問項目を作成し教師の意識調査を行うことでより現場に即したe-learning研修を行うための情報を得ることを目的とする。

B. 対象と方法

1) 調査日時

2008年1月～6月の期間に実施された。

2) 被調査者

関西及び関東地区の公立の現職教師444名（男性：131名、女性：301名、未記入：12名）であった。年齢の内訳は20代が52名、30代が94名、40代が131名、50代が139名、未記入が25名であった。教師経験年数の平均は19年（範囲：1～39年）であった。被調査者の内訳はTable 1に示した。校種は、特別支援学校、小・中・高の通常学級、小・中の特別支援学級とする。

3) 調査用紙

調査用紙は、A3用紙の裏表に印刷されており、フェイスシートと21項目(2件法・4件法・自由記述)の質問から構成された。項目の内訳は、研修(3項目)、問題行動(3項目)、eラーニング(7項目)、パソコンスキル(8項目)であり、詳しい質問内容はTable 2に示した。回答時間はおよそ10分程度のものであった。

4) 手続き

調査用紙は、関西地区で行われた特別支援教育に関する研修会、講演会に参加していた現職教師に配布し、即日回収した。また関西及び関東東地区の小学校に郵送により配布し、回収した。調査用紙は、1225部配布し、444部回収できた。回収率は36%であり、444部のデータすべてが分析の対象となった。

年齢ごとに回答の比率が異なるか否かについて χ^2 検定を行った。5%水準で有意であった項目についてはライアン法

(ryan method)を用いて多重比較を行った。続いて、2件法及び4件法で回答させた項目について校種と回答が互いに独立であるかについて χ^2 検定を行った。5%水準で有意であった項目については前述と同じ処理を行った。

また複数回答項目については、各項目の選択肢それぞれについて校種別にチェック数からパーセンテージを算出した。

6) 倫理面での配慮

すべて無記名によるニーズ調査であり、データは統計的に処理されている。調査者には書面による説明を行っている。

Table 1 被調査者の内訳(人数)

	通常学級	特別支援学校	特別支援学級	未記入	
全体	243	129	47	25	
性別	男性	78	40	9	4
	女性	165	88	37	11
	未記入	0	1	1	10
年齢	20代	29	20	3	4
	30代	49	40	5	2
	40代	69	42	20	5
	50代	93	27	19	3
	未記入	3	0	0	11
経験年数	1~10年	66	54	6	1
	11~20年	47	26	15	2
	21~30年	86	42	18	2
	31~39年	39	6	8	0
	未記入	5	1	0	20

5) 分析方法

分析は回答の方法が異なる項目別に以下の方法で行った。基礎的なデータを得るために、2件法及び4件法で回答させた項目について被調査者全員の回答の比率を示した。続いて、性別ごとにあるいは

Table 2 質問項目の内容

	1、特別支援教育についての研修に参加することをどのくらい負担に感じますか (①とても負担に感じる ②少し負担に感じる ③あまり負担に感じない ④全く負担に感じない) ①と②に回答した方にお聞きします。どのようなことが負担に感じられますか(複数回答可)
研 修	<input type="checkbox"/> 時間がとれないから <input type="checkbox"/> 受けたいと思わないから <input type="checkbox"/> ゆっくり休む時間がほしいから <input type="checkbox"/> 開催の時期が悪いから <input type="checkbox"/> 場所が遠いから <input type="checkbox"/> その他()
	2、全体的な印象として、今までの特別支援教育についての研修が現場にどのくらい活かされましたか (①とても活かされた ②少し活かされた ③あまり活かせなかった ④全く活かせなかった)
	21、今後、子どもの困った行動への具体的な対応についてeラーニングを使った研修があれば、受けたいと思われませんか
	3、今までに授業場面における児童生徒の行動でお困りになられたことがありますか 「はい」と回答した方にお聞きします。それはどのような行動でしたか。過去の経験も含めてお答えください。(複数回答可)
問 題 行 動	<input type="checkbox"/> 課題からの逸脱 <input type="checkbox"/> 暴言 <input type="checkbox"/> 暴力 <input type="checkbox"/> 勝手な発言 <input type="checkbox"/> 奇声 <input type="checkbox"/> ちよっかい <input type="checkbox"/> おしやべり <input type="checkbox"/> 離席(立ち歩き) <input type="checkbox"/> 遅刻 <input type="checkbox"/> 忘れ物が多い <input type="checkbox"/> 指示が通らない <input type="checkbox"/> パニックやかんしゃくを起こす <input type="checkbox"/> 集中が続かない <input type="checkbox"/> こどわりが強い <input type="checkbox"/> 切り替えが難しい <input type="checkbox"/> 相手の気持ちを汲み取ることが難しい <input type="checkbox"/> 一方的なかかわり <input type="checkbox"/> 過剰に反応する <input type="checkbox"/> その他()
	4、上記であげた児童生徒の困った行動に対して効果のある具体的な指導法について知りたいと思いませんか
	5、今までに行動分析又は機能(ABC)分析という言葉聞いたことはありますか
	6、これまでに「eラーニング(e-learning)」という言葉聞いたことがありますか
e l e a r n i n g	7、eラーニングで研修が行われていることをご存知でしたか
	8、今までにeラーニングで研修を受けられたことはありますか
	9、eラーニングで研修を受けることに不安を感じますか 「はい」とお答えした方にお聞きします。どのようなことが不安ですか(複数回答可)
	<input type="checkbox"/> 忙しくて時間がないから <input type="checkbox"/> 続かなさそうだから <input type="checkbox"/> パソコンの操作が難しそうだから <input type="checkbox"/> 逆に仕事が増えそうだから <input type="checkbox"/> ゆっくりする時間が減りそうだから <input type="checkbox"/> その他()
	10、ご家庭でeラーニング研修を受けられるとしたら、参加することができそうですか
	11、ご家庭でeラーニング研修を受けられた場合、研修内容がよければ興味のある先生などに伝えようと思われませんか 「はい」とお答えした方にお聞きします。それはどのような場であればできそうですか(複数回答可)
	<input type="checkbox"/> 特別支援教育に関わる研究会 <input type="checkbox"/> 長期休暇など時間に余裕があるとき <input type="checkbox"/> 日常の時間の空いたとき <input type="checkbox"/> 特別支援教育に関わる研修会 <input type="checkbox"/> 校内研修 <input type="checkbox"/> その他()
	12、パソコンではなく、携帯電話の動画でeラーニング研修を受けられるとしたら、受けたいと思いませんか
	13、パソコンを操作する自信がありますか
パ ソ コ ン ス キ ル	14、以下のもので使用できるソフトはありますか(複数回答可) <input type="checkbox"/> 一太郎 <input type="checkbox"/> ワード(word) <input type="checkbox"/> エクセル(Excel) <input type="checkbox"/> その他() <input type="checkbox"/> なし
	15、ご家庭にブロードバンド(インターネット)の環境はありますか
	16、ネット上で暗証番号やパスワードが要求されるもの(会員登録・買い物・フリーメールなど)に登録したことがありますか
	17、ファイルをダウンロードしてあけて見ることができますか
	18、ワープロ(入力・プリントアウト・保存)ができますか
	19、パソコンでメールの送受信ができますか
	20、パソコンで添付ファイルがついたメールの送受信ができますか

Table 3 有意項目(年齢別)

	項目内容	χ^2 値	p
質問6 (e-learning)	これまでに「eラーニング(e-learning)」という言葉聞いたことがありますか	14.98	**
質問8 (e-learning)	今までにeラーニングで研修を受けられたことはありますか	9.59	*
質問13 (パソコンスキル)	パソコンを操作する自信がありますか	21.26	***
質問16 (パソコンスキル)	ネット上で暗証番号やパスワードが要求されるものに登録したことがあるか	16.75	**
質問17 (パソコンスキル)	ファイルをダウンロードしてあけてみるができるか	15.97	**
質問19 (パソコンスキル)	パソコンでメールの送受信ができますか	34.61	***
質問20 (パソコンスキル)	パソコンで添付ファイルがついたメールの送受信ができるか	37.66	***

※自由度はすべて3である

※ * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 4 有意項目 (性別)

	項目内容	χ^2 値	p
質問5 (問題行動)	今までに応用行動分析又は機能分析という言葉を書いたことがあるか	4.28	*
質問6 (e-learning)	これまでに「eラーニング(e-learning)」という言葉聞いたことがありますか	10.90	**
質問7 (e-learning)	eラーニングで研修が行われていることをご存知でしたか	12.37	***
質問13 (パソコンスキル)	パソコンを操作する自信がありますか	11.10	**
質問16 (パソコンスキル)	ネット上で暗証番号やパスワードが要求されるものに登録したことがあるか	3.90	*
質問17 (パソコンスキル)	ファイルをダウンロードしてあげてみるができるか	6.87	**

※自由度はすべて1である

※ * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 5 有意項目 (校種)

	項目内容	χ^2 値	p
質問5 (問題行動)	今までに応用行動分析又は機能分析という言葉を書いたことがあるか	73.54	***
質問10 (e-learning)	家庭でe-learning研修を受けられるとしたら、参加できそうか	9.10	*
質問16 (パソコンスキル)	ネット上で暗証番号やパスワードが要求されるものに登録したことがあるか	9.12	*
質問17 (パソコンスキル)	ファイルをダウンロードしてあげてみるができるか	7.05	*
質問20 (パソコンスキル)	パソコンで添付ファイルがついたメールの送受信ができるか	6.07	*
質問21 (研修・e-learning)	今後子どもの気になる行動への具体的な対応についてe-learning研修があれば受けたいか	13.32	**

※自由度はすべて2である

※ * < .05, ** < .01, *** < .001

C. 研究結果

1) 各質問の回答について

各項目の有効回答率は85%以上であった。e-learning及びパソコンスキルの項目において、年齢、性別、校種で回答の比率が異なるという結果が得られた。

年齢別に回答の比率に違いが見られた項目は、e-learningとパソコンスキルに関するものであり、性別間で回答の比率に違いが見られた項目は、問題行動、e-learningとパソコンスキルに関するものであった。また校種別に回答の比率に違いが見られた項目は、それぞれ研修、問題行動、e-learningとパソコンスキルに関するものであった。

D. 考察

多くの教師が授業場面において児童生徒の問題行動を経験し具体的な指導法について知りたいこと、e-learningそのものに対する否定的な印象はあまり持たれておらず、参加を希望する教師が多いこと、また教師の大半がe-learning研修に必要な環境およびパソコンスキルを持っていることが示された。加えて、50代の教師はe-learningおよびパソコンスキルに馴染みがないこと、特別支援学校の教師は、関連知識を持っている傾向が強いことなどが示された。実行可能性の側面から考えると、特別支援学校の教師にとって、Web上でのe-learning研修は、パソコンスキルの面での抵抗も少なく、ニーズも満たされる、より有効な手段となりうることが示唆された。

研究3

問題行動に関するe-learningによる研修効果

A. 目的

昨年の研究に続き本研究ではWEB上でのe-learning研修における講義コンテンツの効果を一般の小中学校、特別支援学校教員に拡大し分析した。

B. 対象と方法

1) 期間

2008年9月中旬から11月下旬の間。

2) 対象者

担任する学級に障害があるかそれが疑われる児童生徒が在籍する、あるいは現在担任をしていないが週に1回1時間以上気になる行動をする子どもと関わる機会のある教員35名。これに加え、研修には参加せずアンケートのみに参加した統制群11名。

3) 研修プログラムの内容

オリジナルのHPを作成し、問題行動についての基本的な内容の講義(全8回)を配信した。各回15分前後とし、プレゼンテーションに併せてビデオ講義が見られるように編集した。各講義終了後には、ABAに関する知識を問う演習問題を行わせた。

4) 手続き

受講前および受講後にKBPA、小学校教師版自己効力感尺度、CBCLおよび新版STAI(状態不安)からなるアンケートを実施し研修の効果を検討した。受講期間が最長2ヵ月半から最短1ヵ月半であった介入1群、実施者側がスケジュールを受講者に提示し、受講期間が最長1ヵ月から最短半月で、かつWEB掲示板が使用できた介入2群、および一定の期間を置くことのみによるアンケートへ

の影響を検討するための統制群を設定した。各群のコース概要をFig. 4に示す。

5) 倫理面への配慮

e-learning 研修の効果検証についての十分な説明を行い同意書を交わしている。また氏名などの個人が特定されるデータは要求せず、統計的に処理されている。統制群に対しても同様である。本研究参加における健康上・人権上の損益は発生しない。

C. 結果

研修参加を希望した受講者のうち、介入1群では79%、介入2群では86%が研修を修了した。これは先行研究と比べ、高い比率であった。事前・事後に行なったアンケートの結果、KBPA、小学校教師版自己効力感尺度およびCBCLの得点が、事後で変容していた。

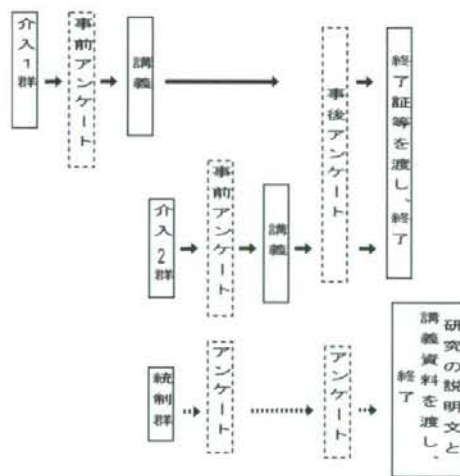


Fig. 4 各群のコース概要

D. 考察

修了者の比率が、先行研究と比べ高かったことは、研修の内容がコンサルテーションなどを含まず講義のみで構成されていたことによって、受講者のコストが低減していた結果であると考えられる。

介入群で見られたアンケートの変容は、本研究の研修での講義の効果を示唆するものであった。介入群の実施期間の問題についてはフォローアップ期間を空けて再度アンケートを行うなどしての検討が必要であると考えられる。

E. 結論

研究1より、学校教育場面での行動問題について、適用しやすく効果的な技法として、機能分析と環境調整が示唆され、研究2でのe-learningの適用に対する教師のニーズ等の調査に基づき、研究3においてe-learningによる問題行動における研修プログラムを開発・実施した。結果、研修プログラムの一定の効果を確認できた。今後は対象を拡大しつつ、子どもの行動変容についてのデータを収集し効果を分析する必要があることが示唆された。

F. 健康危険情報

該当無し。

G. 研究発表

1. 論文発表

1) 井上雅彦・竹中 薫・福永 顕 (2008) 発達障害児支援におけるインターネットを利用した連携システム—保護者が管理者となるコミュニティ掲示板の利用—鳥取臨床心理研究, 3-7.

2) 古谷奈央・井上雅彦・岡村寿代 (2008) 特別支援教育におけるe-learning研修に関する教員の意識調査—問題行動への対応を中心として—発達心理臨床研究 印刷中.

3) 井上雅彦 (2008) 自閉症療育における応用行動分析学の研究動向と支援システム. 小児科臨床, 61 (12), 2446-2451.

4) 井上雅彦 (2008) 特別支援教育の課題

—教育相談と支援研究の立場から（特集
特別支援教育—各地の多様な取り組みと
課題）ノーマライゼーション 28(10)（通
号 327）, 14-17, 日本障害者リハビリテー
ション協会

2. 学会発表

- 1) MASAHIKO INOUE (2008) Teacher
Training and Consultation Program
using Internet for Children with
Developmental Disabilities.
Association for Behavior Analysis 34th
Annual Convention #294-15
- 2) 西谷淳・多賀谷智子・田村弘行・福西
隆弘・丹羽登・竹林地毅・井上雅彦 (2008)
ITを活用した発達支援の情報共有 日本
LD学会第17回大会発表論文集, 213, 広
島 自主シンポジウム

H. 知的財産権の出願・登録状況
該当なし

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	ページ	出版年
奥山真紀子	行動の問題、うつ、自殺	別所文雄 五十嵐隆	思春期医学臨床テキスト	診断と治療社	東京	151-157	2008
泉真由子	5章 臨床の支援と現場	石口彰 池田まさみ	臨床心理学用語事典	オーム社	東京	175-202	2008
辻井弘美, 稲田尚子, 神尾陽子	高機能自閉症スペクトラム幼児の早期診断についての実態調査—小児科医へのアンケート調査結果から—		精神保健研究, 21	国立精神・神経センター精神保健研究所	東京	in press	
杉山登志郎 服部麻子	子ども虐待	森 則夫 中村和彦編	子どもの精神医学	金芳堂	東京	212-230	2008
杉山登志郎	発達障害の診断	宮本信也田中康雄 齊藤万比古編	発達障害とその周辺の問題	中山書店	東京	144-154	2008
浦野葉子 杉山登志郎	破壊的行動障害	本間博彰小野善郎 齊藤万比古編	子ども虐待と関連する精神障害	中山書店	東京	138-154	2008
杉山登志郎	発達段階からみた児童精神疾患	牛島 定信 村瀬 嘉代子 中根 晃編	子どもと思春期の精神医学	金剛出版	東京	624-630	2008
井上祐紀, 加我牧子	注意欠陥/多動性障害・自閉症・学習障害	鈴木康之	よくわかる病態生理 15 小児疾患	日本医事新報社	東京	193-197	2008
井上祐紀, 加我牧子	AD/HD の治療	加我牧子、須貝健司、佐々木征行	国立精神・神経センター小児神経科診断・治療マニュアル・改訂第2版	診断と治療社	東京	349-352	2009
井上祐紀	AD/HD に伴う行動障害 (お	加我牧子、須貝健司、	国立精神・神経センター小児神経	診断と治療社	東京	352-354	2008

	よび併存障害) に対する薬物療法	佐々木征行	科診断・治療マニュアル・改訂第2版				
Kaga M, Inagaki M, Kon K, Uno A, Nobutoki T	Diagnosis of Auditory Neuropathy(AN) in Child Neurology.	Kaga Kimitaka, Arnold Starr 編	Neuropathies of Auditory and Vestibular Eighth Cranial Nerves.	シュブリンガー・ジャパン	東京	123-133	2008
Kaga M, Inagaki M, Yoneda H.R.	Auditory and visual mismatch negativity(MMN) in children with typical and delayed development.	Ikeda A, Inoue Y (ed.)	Event-related Potentials in Patients with Epilepsy: from Current State to Future Prospects.	John Libbey Eurotext	Montrouge	59-68	2008
田中恭子, 加我牧子	社会性と対人認知の発達と変貌 乳幼児期からの精神発達とその生物学的基盤	中根晃 牛島定信 村瀬嘉代子 編	詳解子どもと思春期の精神医学	金剛出版	東京	30-36	2008
加我牧子, 稲垣真澄	発達障害	有馬正高監修 加我牧子 稲垣真澄編	小児神経学	診断と治療社	東京	422-424	2008
軍司敦子, 加我牧子	自閉症の非侵襲的脳機能検査	有馬正高監修 加我牧子 稲垣真澄編	小児神経学	診断と治療社	東京	506-507	2008
加我牧子	精神遅滞による言語障害	森山寛 他編	今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針 第3版	医学書院	東京	545	2008
古島わかな, 加我牧子	乳幼児の精神運動発達とその異常	鈴木康之編	よくわかる病態生理 15 小児疾患.	日本医事新報社	東京	188-197	2008
加我牧子	成長・発達	精神保健福祉士・社会福祉士養成	医学一般—人体の構造と機能および疾病—	へるす出版	東京	1~12	2008

		基礎セミナー 一編集委員会編					
田中康雄			軽度発達障害 繋がりあって生きる	金剛出版	東京	310	2008
田中康雄	発達障害の医学的概論(1) -軽くとも生き難い子ら-	鶴 光代	発達障害児への心理的援助	金剛出版	東京	21-34	2008
田中康雄	発達障害に対する精神療法的視点	田中康雄 宮本伸也	発達障害とその周辺の障害	中山書店	東京	223-235	2008
小枝達也	発達性読字障害 (Developmental Dyslexia) の病態と治療的介入法について	日本小児神経学会教育委員会	小児神経学の進歩	診断と治療社	東京	155-164	2008
小枝達也 関あゆみ 内山仁志	疾患としての読み書き障害 就学早期からの治療的介入の試み	教育と医学の会	教育と医学	慶應大学出版	東京	74-83	2008
近喰ふじ子 宮尾益知			障害児の理解と支援-臨床の現場へ	駿河台出版社	東京		2008
トニー・アトウッド		辻井正次監修	ワークブック アトウッド博士の「感情を見つけにいこう」(1) 怒りのコントロール	明石書店	東京		2008
トニー・アトウッド		辻井正次監修	ワークブック アトウッド博士の「感情を見つけにいこう」(2) 不安のコントロール	明石書店	東京		2008